

會



報

1958年12月

201

日本山岳會

会長就任のご挨拶

日高信六郎

別宮前会長の急逝は突然のことであつただけにわが日本山岳會にとつて大きなショックであつた。そのむかし、夏の飯豊、冬の朝日に新しいみちを開拓し、黒部に未知の秘境をさぐり、欧州アルプスの岩と氷に親しんだ輝かしい山歴をもち、棋会長のあとをうけてはマナスル登山を成功にみちびき、昨年ネパール印度から欧米をめぐつて、親しく各国の山岳界と交わりを固め、今秋団体登山部門の会長として、立山で全国岳人の先頭に立たれたのを最後に、忽焉として逝かれた。その功績をわれわれは長く忘れることが出来ず、その温容は氏を知るすべての人の思いに残るであらう。

去る十月二十五日の臨時総会において、私は別宮さんの死によつて生じた欠をうづめるべく、その残存任期たる昭和三十五年三月まで会長に選任された。しかるに、私は別宮さんや棋さんのような誇るべき山歴も登山技術の持ち合せもなく、長いあいだ日本を離れていたので、昭和時代本邦近代登山の興隆期を知らず、戦中戦後の山岳會受難期の実情に通ぜず、小島さん以来すぐれた登山家をつぐ任にあらざることを、みずから痛感す

るのである。しかし総会で指名をうけた以上、会員のみなさんのご援助とご協力によつて、その任を果たす決心をいたしましたのである。

わが日本山岳會はすでに五十の齡を重ねた。それはじめ少数の山好きの集りであつたものが、だんだんと大きくなつて今日に及んだ。その間幾多の変遷はあつたが本邦登山界の黎明期から隆盛期にかけて、啓蒙推進のために尽した功績は大きなものがあると思ふ。しかも山好きの集りとしての伝統をもちつづけて、会員相互の間に一脈の親しみを通じ合つていくことは誇つてよからう。私はふるくからの会員の一人として、このよき伝統を守つて行きたいと思ふ。

日本山岳會は会員相互の研究と実践によつて、登山技術と登山道の向上に貢献すべきであると同時に、戦後は日本体育協會の加盟団体として、団体登山部門を担当し全国の登山界のために尽す義務を負つてゐるのである。

他方、わが會は各国の山岳會から日本の代表的存在として認められ、相互の交通や文通はますます頻繁になつて来た。マナスル登山の成果が高く評価されて、これは、別宮、棋、松方の諸氏が親しく各国を訪ねて、多くの權威者から確められたところである。われわれは今またヒマルチュリに遠征隊を送り出すべく準備中であるが、その他の海外遠征についても援助を惜まないであらう。神戸大学のバゴニヤ遠征や、京大学士山岳會のチョゴリザ登頂はわがこ

とのように嬉しく、南極観測越冬隊の有力メンバーにわが会員の多数が参加したことは、われらの誇りとするところである。

かく親じ来ると、内外ともに日本山岳會のなすべきことは甚だ多く、その任はますます重たいといわねばならぬ。

私は、以上のような状況に顧みわが日本山岳會のふるい伝統を守つて、全国会員の親睦をふかめつつ、新しい時代に即した会の活

目次

- 会長就任のご挨拶……………(一)
- 外国隊の印象……………(二)
- ヒマルチュリの山名について……………(三)
- インド登山学校と当会との間……………(四)
- の最近における交流……………(五)
- 登頂のすぐ後に……………(六)
- ギド・レイについて……………(七)
- 林並木氏の逝去……………(八)
- 図書紹介……………(九)
- 会員通信……………(一〇)
- 東京支部便り……………(一一)
- 会務報告……………(一二)

外国隊の印象

藤平正夫

今年のカラコラムわけでもバルトロは近年にない賑いだつたらしい。アメリカのヒドン・ピーク、ガッシャーブルム四峯を狙うイタリア隊そしてわたくしらのチョゴリザと大きな遠征隊が三つも入つたのだから大賑いだつた。

ネパール・ヒマラヤの物が殆ど片付いたので残るはカラコラムというのが世界の登山界の傾向かも知れない。

おかげでいろいろなことにあらうことが出来た。良いことも悪いことも。

変なことだがアメリカ隊が一番貧乏だつたらしい。イタリア隊はけた外れに豊富でゆつくりしていた。私等の隊はアメリカ隊とにたもので、少しましな位だつたらしい。イタリア隊は金をばらまいたという事ではないがクレーリーの要求に対しては相当良い条件で応じていたので後から行つた私達は難しかった。アメリカ隊は一カ月前に入つたので私達のような苦勞はなかつたらしい。

イタリア隊ではこれだけを支払い、これこれを呉れたというのがクレーリーのいつもの言いぶんだった。あとでイタリア隊に会つた時に聞いてみると大体クレーリーの言つた通りだつた。

ベスキャンプへはアメリカ隊もイタリア隊も訪問して呉れた。

ヒドン・ピークに登頂したのが七月四日で私達はコンコルディアでそのしらせを聞いたので早速アメリカ隊宛に祝賀のメッセージを送った。その返事を兼ねて七月九日私達のB・Cをおとすれた。

クライミング・リーダーのショーン・ニング(日本ではシェーニングと発音しているが本人に聞くところによると「ニング」と言っていた)とバキスタンのリズビー大尉の二人である。

ショーン・ニングは六尺近い堂々たる体格で陽にやけた顔が痛々しい位赤くたれ鼻の先に皮がぶらぶらついていた。アメリカ人らしく人見知りせずフランクでスカッとした笑に気持の良い男だった。

ヒドン・ピークのルートを図に書いて詳しく説明してくれた。アタックは高度差約三千フィートの上下で登りは一分間二リットル、降りは一リットル酸素を使用しただけで、酸素はあまり使いたくないとまぜつ返したら眼を丸くして、使わないと苦しいからと弁解していた。

たことだった。もつともアメリカ隊のビスケットを買って食べたところがあるがあまりにバナナが入っていてどぎついものでとても半期間飽きずに食べられる代物ではない。

余ったケロシンをガロン手土産に持つて来てくれたのは助かった。イタリア隊はヘルマン・ブルの未亡人から遺品を持つて来てくれと頼んでいるので、もし発見したらB・Cへもつておいてくれないか。八月十二日にそちらのB・Cへ寄るからと、あらかじめ手紙が来ていた。

十二日は雪がちらつく日であつたが副隊長のフォスコ・マライニと登頂したボナッティ隊員等四名が訪れた。

フォスコは御承知の通り著書の邦訳が二つもあり、同じ京大に数年間講師をしていたことがあるので日本語はペラペラだった。

私達の集会所(望遠亭と名付けていた)に入るなり、

「日本のお茶飲みたいですね。海苔ありませんか、お新香もたべたいですね」とやられたので度胆を抜かれた。他の隊員は一人が英語を喋れるだけで他の二人は全然駄目だった。手真似と固有な名詞を並べて結構話が出来た。

ボナッティはクルマニールのガイトで二十八才、映画俳優にしたいような美男子であるが身のこなしなどは精か、びんしようそのものだ。この男が岩場を登るのは見事なものだろーんと思わせた。何か盛んにモンブランというの

で手真似を見たら、ヨーロッパへ来るのがあつたら一緒にモンブランへ登ろうというところらしい。すると隣の隊員が(ドクターだそ)うで英語がしゃべれる。

「俺はドロマテに住んでいる、イタリアへ来たならドロマテへ一緒に行く」なんて言い出す。

彼はヘルマン・ブルと親友だ。そうでブルの遺品を渡したらひざまづいて押し頂いた。雪のちらつく岩の上でバルト氷河を背景にしてじつに印象的な光景だった。

イタリア隊はアメリカ隊とちがつて髭をきれいにそつていた。髭といえば桑原さんと加藤さんがラウル・ビンデのホテルでハラモシユへ登つたとき彼等は髭を伸ばし放題にしていて日本隊は何故髭をそつているんだと不満気だつたそうである。

オーストリー隊はブルのとむらい合戦の意味でチヨゴリザは是非やりたかつたらしくて、オーストリーの公使がカラチの日本大使館へチヨゴリザをゆづつてくれと申込んできたりしたこともあるし隊員もチヨゴリザの写真入り葉書を用意してきていた。

何だか気の毒なことをしたような気もする。ともあれ山に登る奴、わけでもヒマラヤくんだりまでこようという連中はアメリカだろーやイタリアだろーや、オーストリーだろーやがトボけた奴許りで俺達と同じじゃないかと皆で笑ひあつたものである。

ヒマルチュリの名について

松田 雄一

ヒマルチュリに對しこの呼び方も今までヒマル・チュリ、ヒマル・チュリ、ヒマル・チュリ、ヒマル・チュリ、ヒマル・チュリなどまちまちに使用されておりました。また山の名のもつ意味についても不明確でしたので、ここで一応語源的にもはつきりしておき、呼名も統一しておいた方がよいと思います。

印度測量部の地図には Himachal Chuli と記載されておりますが、ラードの「概略」には Himachuli とヒマラヤ研究の權威者といわれるディレンフル博士は Himachuli、マルセル・クルツは Himachul、ケネス・メーソン氏は Himachul、日本山岳会の日記、木暮理太郎氏は Himachul、またこの山を偵察したティールマンは Himachul、そしてネパール政府ですら Himachuli、Himal-Chuli、Himalchuli、Himalchuli の三つを使用しているのです。ところでヒマルチュリの意味ですが、ヒマルはともかくとしてチユリについて幾つもの解釈があり「錐の雪山」などともいわれましたが、最近に至りこの錐というのはこれを説明したネパール人がたまたま手許にあつた大工用の錐を指してこの様な山をチユリというのだという説明を早合点して錐としてしまつていたようです。(イン

ド語の辞書にありません) この語源について先遣隊に調査を依頼した結果、ベニス・キャンブからの通信にヒマルチュリとは「雪の峰」という平凡な名前だと報じてきました。日本語でいえば白根山とでもいうのでしようか。なるほどカトン・ジュの丘などから遠望すれば真白に輝いて登えなつてくるこの峰を他の連山と比較して Snowy Peak といつても不思議でないほど、真白な山なのです。一方ヒマルチュリの語源についてサンスクリットの權威、早大の田中於菟弥先生にお尋ねしましたところ、Himalchuli にあたる梵語はありますが、ヒマラヤのことを梵語で Himacala (= hima 雪 + acala 不動) と、これの近代インド語は梵語の最後の a が落ちますから Himachal となる訳で、これがヒマラヤとなり、更にアングロナイズされた時に Himachal から Himachuli になつたと考えられます。印度大使館の Tewart 氏は Himachuli は間違つて Himachul が正しいといつています。Himalchul を語源とするものなら「雪の峰」と一致する訳です。インド語を英語式に書く時には a を表わすことが多く(例えば Punjab = Panik (a) + ab (a) chuli の a は a のように発音すべきなのでしょう。(語尾の a は近代インド語では小さいものを示すのだそうですが、ここでは意味がわかりませんが) とすればヒマラヤがアングロナイズされる時にヒマル・チュリとなつたのであり日本式にいう場合にはヒマルの次のハイフォ

ンとはつて、ヒマルチャリ、またはヒマルチュリとした方がよいと思います。

ヒマルチュリのルを強いて説明すれば語源を Himalayacala (Hima (雪) + alaya (住) + acala (山)) 訳を「雪の住処の山」ととればよいと思います。こうすれば Hima-ichuli と変化したことの説明もつくとあります。なお今後は一般にはチャリでなくチュリとよばれておりますのでヒマルチュリと呼ぶことに統一したいと思ひます。

インド・登山学校と 当会との間の最近に おける交流

ダージリンに新設された Hima-layan Mountaineering Institute については、すでに告知の方も多いと思う。第一次、第二次のマルナル隊のサーダーであったガルトン・ミクチェンがこのインストラクターになったために、第三次隊には参加不可能になったことはマナスルに興味をもつものなら知つてゐることと思う。最近会はこの登山学校と密接な関係をもつようになつた。そこでこの間の事情を少し説明してみようと思ひ、関連記事を見付けだそうと会報を調べてみたが、一七五号の寄贈図書欄の十九番目に同登山学校に関するパンフレットが外務省から寄贈されたことが二行ほど出ていた以外には、残念ながらついに見いだすことができなかった。

でもこの機会に少し説明してみることとする。

一九五三年のエヴェレスト登頂によつてインドでも、にわかに登山熱が持ち上つてきた。中でも最も熱心であつたのは山の街ダージリンをもつウェスト・ベンガル州の知事 Dr. B. C. Roy 氏であつた。ロイ博士はテンジンのエヴェレスト登頂とその勇敢なシェルパ達を記念する意味をも含み登山学校設立を提唱した。すなわち彼のアイデアとは「インドの高い山脈とシェルパ・クライマーを有しているが登山学校をもつていない。ダージリンに住んでゐる有名なインド人、テンジンのエヴェレスト征服を記念する意味においてもウェスト・ベンガル政府はテンジンをチーフ・インストラクターとして登山学校を設立したい。そしてその場所はカンチェンジュンガや他のシッキム・ヒマラヤの登山ポイント・ヒル(棒丘、二〇九〇米)に建てたい。」

校は発足したのである。すなわち運営委員会のメンバーにはチエアマンとしてネール首相、副代表にロイ博士を迎え、役員にはインド各界の名士が名を連ねてゐる。このことは本校の運営がインド政府並びにウェスト・ベンガル州によつて行われ、これを意味して、事実これに要する全経費がこうした国のお台所でまかなわれているのである。

一方インスティテュート・スタッフの方はインド登山界のパイオニアで、トリズル、カメット、ヌンケン等への登山経験をもつ N. D. ジャール少佐が校長、テンジンが Director of Field Training、アンタルケイが Senior Instructor、インストラクターとしてハギルツェン・ミクチェン (M. C. No. 57)、ダナムギャル (H. C. No. 157)、アンテンバ三三 (H. C. No. 155)、ナワン・ゴムブー (H. C. No. 191)、ナワン・トッパケイ (H. C. No. 233) の五名、Accounts officer R. ライ氏、Cinematographer M. サイン氏で構成されてゐる。ジャール少佐はスイス山岳研究団によつて推薦された。(彼はすでにスイス登山学校で教育を受けていた) 六人のシェルパ・インストラクターはテンジンによつて選ばれたが、彼等は向う五カ年間の給料、食費、宿舎などを西ベンガル州によつて保証されて他のシェルパの羨望を浴びた。

この学校における教育内容は、一般登山技術の指導、訓練などの外に科学的見地、教養的見地に立つて一般学科を教え、この中には探検、登山の歴史、ヒマラヤ登山史、地理、地質、動植物(高山植物の知識)、地図に関する知識、気象学(モンスーンの知識等)、高所に対する人体生理、アクリマタイゼーション、応急処置、遭難対策などの他広くリダー・シップ、メンバード・シップなどに関する指導までも含まれてゐる。臨時講師としてはしばしば名士を迎え、カンチの隊長、チャールス・エバン博士なども教壇に立つてゐる。

トレーニング・コースは基礎訓練を主としたベーシック・コースと、ベーシック・コースを終了したもののためのアドヴァンスド・コースの二つに大別され前者は、三、四月、四、五月、九、十月、十一月、十二月の四回、各四二日、各回二十四名の編成で行われ、後者は夏のシーズン六、七、八月の間の六、八週間にわたり十二名のメンバーにより実施される。

ベーシック・コースの教育内容に関してはいづれにかなる機会に詳しく書くことにするが、このコースの最後には二四日間わたる訓練旅行を行つてゐる。各生徒はそれぞれ三〇、四〇ポンドのリュックサックを背負つて九日間の行程でカンチの山麓ゾングリへ向ひ、その付近一四、一五、〇〇〇呎にベイス・キャンプを張つて約十八日間周回の一八、〇〇〇、一九、〇〇〇呎峰へ登攀して岩と雪、水に対する訓練を行う。帰路は他のルートを経由して、約一週間、地図の読み方、高山植物などの勉強をしながらダージリンへ帰つてくる。そしてダージリンへ帰着する最後の二、三日間に今まで習つたことのテストを行い、また装備の整備を行つたりする。尚これらの訓練内容についてはマウンテン・ワールド一九五五年版に詳しく紹介されてゐるので参照されたい。

アドヴァンスド・コースというのはベーシック・コース卒業生の中の優秀な生徒を対象とするもので、二〇、〇〇〇呎以上の高峰に對して遠征を行い、この計画を通じてベーシック・コースでは得ることの出来なかつたほどの問題を学ぼうとするものであり、さらに未踏地を踏査し、科学的未調査の地域(シッキム、ネパール、クマオン、ラホール、スピッティ、カシミール等の地域)を踏査することによつて科学的成果をもたらすというものである。このコースは一九五五年から始められたが、一九五五年には見事カメットの頂に立ち、一九五六年はカラコラムのサセル・カンリを計画した。この時にはサセル・カンリ(二五一五〇呎)は未踏に終つたが付近の Sakang Peak (24,150 feet) の登頂に成功。そして一九五七年にはインド国内の最高峰ナンダ・デવીを目標とした。この時は悪天候のために惜しくも頂上直下まで達しながら失敗に終つてしまつた。しかし一九五八年の五月にはついにインドル隊による最初の八、〇〇〇米、チョー・オユーの第二登に成功したのであつた。一九五三年に目ざめたこの国のアルピニズムが極めて短日にこまで成長したのは、一にこの登山学校によるといつてそれは決して過言ではないだらう。しかしこのチョー・オユー登頂の陰には専ら二名の

犠牲のあつたことを忘れてはならない。その一つはシムラよりカトマンズへ向うインド隊のチャーター機がカトマンズ盆地の入口で墜落し、荷物三屯とともに、同乗の隊員一名が遭難したこと（深田久弥氏報詳細不明）ともう一つは、このインスティテュートの設立準備当時より常に陣頭に立つて活躍された校長のN・D・ジャヤール少佐の四月二十八日、標高一八、〇〇〇呎のB・Cにおける急性肺炎による急逝事故である。（会報一九七号報）同隊はこれに屈せず登高を続け、五月十五日に見事チヨ・オユーの第二登に成功したのであつた。せめてジャヤール少佐に、八、〇〇〇米登頂の報を聞かせた後に死なせたかつたと思うのは私一人だけだろうか。インド隊にとつて、インド登山学校にとつては八、〇〇〇米登頂の喜びと較べてなんと大きな犠牲であつたことだろうか。

当会ではだちにインド登山学校に対し丁寧な申意を表すとともにチヨ・オユー第二登の祝意を打電しておいたが、これがその後同校と当会とをしつかりと結ぶ強いきずとなつた。

ジャヤール少佐の後任にはギャン・シン大佐が就任した。そしてそのギャンシン氏から六月三〇日付当会会長宛に次のような手紙が届いた。

（前略）……デンジンと他のスイスのローゼンロイ登山学校で訓練をうけた六人のシェルパをインストラクターとしてわれわれの登山学校が活動していることはすでにご承知のことと存じます。

この度、自分の学校ではダーリンに新校舎を建てたが、それとともに校内に「山岳博物館」をつくることになりました。就而は、世界名国の山岳会並に登山学校のバッジ、旗を陳列致したく存じます。貴会のバッジ、旗を御寄贈いただければ幸いです。なお他のアジア諸国の中に山岳会や登山学校がありましてら御紹介いただければ幸いです。当校の「概要」を別便にて御送りいたしますから御査収下さい。敬具。

（このBrochureは八月上旬当会宛到着、図書室に備えた）
これに対し当会では早速七月十七日の役員総会にこれをはかり、会の正、副章並びにマナスルの報告書を同校宛寄贈、旗は適当なのがないので会のペナントを作つておくことになった。

その後八月三日付にて同校長より「七月二十五日付貴信有難うございました。美しい二つのバッジは今日確かに受領致しました。当校の博物館に陳列できることを光榮に思つております。貴会のペナント並びにマナスルの公式報告書の到着を楽しみにしております。貴会の活発な登山活動に對してはかねてより大きな関心をもつております。どうか当地を訪れる貴会の登山隊のメンバーに、当校へ来訪下さるようお願い下さい。私は次の貴会の隊に雇傭されたガルツエン・ノルブに会いました。彼は大変元気で、貴隊への参加を彼が望みます。われわれは当校の卒業生の何名かを外国の登山隊に加えて、実地に勉強させたいと思つております。特に日本の隊には大

きな関心を寄せておりますので、もし貴会の登山隊に一、二名の若いメンバーを参加させていただくことが出来れば大きな幸わせます。また当会では16ミリのプロジェクターを備えて視覚教育も実施しておりますので、もしこうした登山フィルムがありましてら御提供いただければ幸いです。これと平行して、ギャンシン校長は、かつての同僚で現在日本のインド大使館の陸海空軍武官をつとめている、コネル・A・N・カンナ氏にも便りを送り日本山岳会を訪ねて種々と情報を知らせていただきました旨依頼した。そしてカンナ氏が別宮会長を訪ねたことによつて、この問題は大きく進展した。最近インドでは日本の登山装備に大きな関心をもつているので、装備の写真によるカタログを特に「好日山荘」の会員海野治朗氏にお願いして作成していただいた。将来は同校の装備がスイス製に代つて、日本製装備に代ることを念じている次第である。一方映画の方は毎日映画社に依頼した。すでにマナスルのスライド・セットは古市美津雄氏より同校宛寄贈され「マナスルに立つ」の映画は在ニューデリーの日本大使館常備の16ミリフィルムを見本として、貸出すことになった。

当会では去る九月三日の夕方、別宮会長、日高副会長、三田、交野、入沢、成瀬、小原、初見、山崎、浜野、折井、望月、松田などの有志が集まり、盛大にカンナ氏を歓迎した。この集りは大へん愉快な会であつた。

過日インドのブラサド大統領が来日し、これを機会に、日本とインドが政治的、経済的により親密なつながりをもつことになると思ふが、登山界の方もこの機会に、日印両国の交流がより盛んになることを祈念して止まない。
（三三・九・二八日 松田）

登頂のすぐ後に(5)

沼井鐵太郎

ムズターグ・アータ及び
クンケール九別山の初登頂

一八九四年夏スウェン・ヘデインの試登（六三〇〇米まで）、一九〇〇年七月サール・アウレル・スタインの試登（六一〇〇米まで）から約半世紀彼の一九四七年八月になつて、われわれと馴染の深いギヤルツェン・ノルブを連れた英国のシプトンとティールマンが、前者のとつた北山稜を無理と悟つて南山稜に二つのキャンプを設営、酷寒風の中を、カシユガル山脈のムズターグ・アータ（七四三三米）最上部に向つたが、七三〇〇米以上のドーム頂の一端に達し、高度よりも距離の問題で悩んで、まだ最高点にはきていなかつた。ほんの数米の下の地点まできていたには違ひなかつたけれど、ついに安堵と無念さの混り合つた気持ちで一行は開いて断念した。

九号所載、深田久弥「ムズターグ・アータ、ヒマラヤ七千米級の山々・五」による、昭和三十一年七月発行）ヒマラヤ山岳の一般的峻険実体に比較して、この山の山背が平頂または平稜性のものならば、大まかに登頂リストに加えてもよいし、或いはもう少し正しく、山背初登又は初登（最高到達点絶頂下数米）と記録してもよいだろう（会報一八八号所載、沼井「続・登山の記録というもの」参照）。

シプトンが安堵といつたのは山背到達の安心であり、無念といつたのは最高点を踏む余裕のなかつた残念さといふことであつたろう。

しかるにムズターグ・アータ真の初登頂は一九五六年中華・ソ連の合同遠征隊によつて果された。今「山と溪谷」二二三号（昭和三十三年三月）二七三三七頁所載、師秀・胡本銘の記、大曾根純の編訳「氷山の父（ムズターグ・アータ）初登頂」によつて、筆者流の登頂分析を試みてみよう。因みにこの記事ではその標高を七五四六米としている。

六月中国登山隊員十二名は北コिकासでソ連隊員と合流し、基礎訓練を受けた後、氷雪での実際の中ソ隊員はシプトンのルートを取り、七二〇〇米の第三キャンプから、隊長ベレツキイ、副隊長クイズミン及び史占春の統制下に、最後の三百余米を登攀、午後二時全員登頂を了した。時に七月三十一日であつた。そして先登者はク「われわれは一切の困難をも忘れ、互にいだきあい喜びあつた。

勝利の題字を刻みつけ、それぞれ何故か写真をとる。隊長ベレツキイはベースキャンプを通じ、無電で北京とモスクワに勝利のニュースを送った。勝利の喜びは天にもとどかんばかりであつた。」

八月十六日と思われるが、この日の内八名（隊長クルーズミン、中国隊員彭仲穆、陳宮昌を含む）は、ムズタグ・アータに隣するクングール九別山（中ソ隊報告で

は七五九五米、本会山日記によればクングール一号が七六四米、同二号が七六八一米(要再調)。にも初登頂した。時に午後三時。「襟をたてて吹きつける風を防ぎながら、すべてを忘れて互に喜びあう。心はたえまなくわき上る。い知れぬ喜びにひたつていた。」

以上記事出所は中国の新聞報道によるものらしいので、いづれ正式報告、特にソ連のものを検する

必要はあるが、とりあえず中国登山家の手記訳を取り上げてみた。
ムズターグ・アータの登頂行事で特に注意をひいたのは、山頂から無線でベースキャンプを通じ両国の首都に登頂のホット・ニュースを送つたことである。これは八千米峰では未だ行つていない科学技術の勝利でもあり、またそれを可能にした山体地形も考えられる。頂上にケルンを積み上げるだけ

▽隊長 村木潤次郎（三五才）東京出身、早大理工学部 日本山岳会常務理事 早大山岳部監督 早大博物館研究所勤務、通信を兼務 早大山岳部OB マナスル第一、二、三次隊員

松田雄一（二八才）東京出身 早大工学部

彼には山に関する著書は一冊なく、また、彼が偉い登山家であつたといふことをあまり書いてあるものもないので、彼の登山について は本人自身から直接聞くか或いはガイドから聞くより手はなかつたそうです。しかし一面、常に山で先輩に邂逅しても傲慢な態度の過度によりアルパイン・クラブにはブラックボール組であつたと、彼の温厚なるロングスタッフまでいつている位ですからギド・レイがエグイユ。

ベルトの頂上まで選……………ギド・

機嫌のいい時をネラッてはランは昔の古い山の先達や、山登りの話を聞き出すことにしていたそうです。

チエス遊びでは彼のホテルで遊ぶ時はいつも、十時頃になると必ずランの方を見て「一杯どうだ……」と尋ねるので、ランは得たりとばかり「そうだ……いいなあ」と答えると、ウイスキーでも出すのかと思いきや、左に非ず、必ず水を二杯持つて来させたそうです。

イについての筆者に（承

は昨年、アルバイン・クラブ百年祭に敬意を表して、スイス山岳会が編集した“Century of Mountaineering: 1857-1957”から得た私の受売りに過ぎないことを最後に告白致し、久振りでギド・ライの“Peaks and Precipices”の頁を“*The Aiguille Verte*”の頁を添へ、かつての講演の思出を新たに致しましたことを申し添えます。詳しくは“Century of Mountaineering”の V. J. E. Ryan を御一読ください。

の字が、おつたに、岩が、勝利の
題字を刻仰する岩石裸出のあつた
事も、シブトン報告からの想像と
はかけ違つてゐるようでもあつ
た。なお岩に字を刻むのは、西欧
でも名所などにまゝ見る人類一般
の風習だが、中国人、韓国人、そ
れに古来の日本人なども先進文化
の流れにしたがつて、梵字や漢字
を寺や山の岩石に掘る特殊伝習を
備えている。これには多分に宗教
的の由来觀念の影響もあるう。し
かし自然愛好の本来からすれば、
初登頂といへども、山頂に永久的

日魯漁業株式会社勤務 渉外、
 經理、氣象担当、大江山岳部〇
 B マナス才第二、三日隊員
 石坂昭二郎(三〇才) 新潟県出身
 大経済学部 日本山岳会理事
 東京出版販売株式会社勤務 食
 糧担当 大江山岳部〇B マナ
 スル第一次隊員 ヒマルチュリ
 先遣隊々員
 田辺寿(二七才) 東京都出身 慶
 大法学部経済学部 日本山岳会
 会員、三越本店勤務 裝備担当
 慶大山岳部〇B
 竹田寛次(二四才) 東京都出身

印象も、必ずしも
レイ自身の謙遜ばかりでもないよ
うです。

成瀬

岩雄……「について」の筆者がレイについてまが致してくださる

役員総会
(一九五七年七月稿)

松崎建設事務所勤務 裝備担当
早大山岳部OB
山野井武夫（二四才）栃木県出身

面白いことには彼はチェスの大家で後年グリンデルワルドのホテル住いをしていましたがチェスのトーナメントがある時には始終ロンドンに出掛けて行き、グリンデルワルドではただ一人のチェス仲間としてしばしばアーノルド・ランと行ききし、時には夜更くるまで続くこともあり、稀にはランが勝つこともあつたそうですが、御

「……まあいいか……」と仕向けて見ると彼は顔として「水一杯……」といったような具合に、いつもこういつた順序でチェス遊びは運ばれて行ったのだが、どうも、彼はアルゴールはチェス・ゲームの威厳を巧すかと思つていたようだと言は付け加えております。

それにつけても、レイ自身は最
まで、この相手を知らなかつた
でしょうか……という気がして
りません。

(一九五八・九・十六)

× ×
× ×
× ×

▽十二月十二日本会図書館で開催
出席者、日高会長、理事浜野、
村木、山崎、松田、石坂、田村
評議員、藤木、小原、入沢、望
月
▽議事および報告
日高会長より別項の通り村木隊
長以下ヒマルチュリ隊員選考事
情および隊員氏名発表あり、村
木隊長より功績褒賞の発表あり、

立大経済学部出身	日本山岳会
々員 常磐製材勤務	食糧担当
立大山岳部OB	
住吉仙也(二三才)	福岡県出身
大阪大学医学部	日本山岳会関
西支部委員 神戸医大第一外科	
解剖学教室研究生 川崎病院及	
び川崎製鉄嘱託 医療、酸素担	
当 大阪大学山岳部OB	
木村勝久(二八才)	茨城県出身

キド・レイについての筆者に（承前）

(一九五七年七月稿)

▽十二月十二日本会図書室で開催
▽出席者、日高会長、理事浜野、

村木、山崎、松田、石坂、田村
評議員、藤木、小原、入沢、望

▽議事および報告

日高会長より別項の通り村木隊長以下ヒマルチュリ隊員選考事

情および隊員氏名発表あり、村木隊長は行動概要の説明を行っ

早大山岳部OB

山野井武夫（二四才）栃木県出身

立大 山岳部OB 常磐製材勤務 食糧担当

住吉仙也（三三才）福岡県出身

西支部委員 神戸医大第一外科

解音字塾室研究生 川崎病院及び川崎製鉄嘱託 医療、酸素担当 大阪大学山手町

木村勝久（二八才）茨城県出身

日大芸術学部写真科 毎日新聞
社勤務 報道及び写真担当

林並木氏の逝去

林並木氏（会員番号四九番）が昭和三十三年十月二十二日福岡市で死去された。年八十五、明治六年五月高知県佐川町にて生れ帝大英文科卒業後、京都真宗大学に五年奉職、明治三十五年から昭和八年まで金沢第四高校に英文学教授として奉職、退職後は京都に十一年郷里高知に九年晩年は福岡県水巻町（エブリ）に住居されていた。（山歴）富士、白峯三山、赤石、塩見、御岳（2回）、乗鞍（3）、駒ヶ岳（2）、槍ヶ岳（4）、穂高岳（3）、笠ヶ岳（2）、大天井（2）、立山（9）、水晶、栗師、白山（3）、白馬（4）、針の木、鹿島槍、八ヶ岳、大雪山、鳥海、大台ヶ原（3）、朝鮮、台湾の山々、ヨセミテ、マリポーザ、コロラドのイエローストーン、ロッキー、ニューフアンランド横断等。

わたしが先年先生が未だ高知の佐川町にお住いの時お訪ねした時の思い出を書いてみます。

林さんと山のつながりは、子供の頃石鎚山へ兄が行ったのが病みつきです。翁は明治三十五年金沢四高に奉職されて以来地元の立山を手始めに昭和十五年槍穂高の縦走まで実に四十年間殆んど単独登山されてきたようである。真白い頭髮、キチンと端座した姿は山男と言うより学者タイプのようである。話をしていきますよ」と黒い眼鏡の底から人なつこい言葉で話しかけられた。「私は山を考へるのが一番の幸福です。人は何のために登山するのか不思議そうに尋ねま

すが、私は浩然の氣を養うとかスポーツであるというわけではなしにただ山が好きだからです」山の話になると「冷えた血管に温い血が通うような気がする」「人生の下り坂を静かに歩きながらも今なお立山にあらがれ、長かつた山の旅の追憶をひもときながら、その日その日を感謝に生活していた。古風な翁の邸のまわりには、ムクゲのいけ垣が青々と繁っていた。お別れの時に翁は「ラストリフの詩ですね」と静かに語られた。

同封の写真はマナスル展が高知で行われた時「昔はわらじばきにふりわけの荷物をかきついで山へ登つたものですが大した進歩です。マナスル登頂はわたし達の夢です、ぜひかなえてほしい」と成功を祈つていますと感無量でした。（小松勇）

林並木さんについて

沼井鐵太郎

去る十月二十二日に亡くなられた林並木さんは、今井北甲氏、別宮会長に次いで本会並びに登山界でまたの損失の一人であつた。今の若い世代の方々には関心は殆ど無かるが、林さんが現名譽会員田部重治さんの学校の先生だつたことは知つてゐる向も少くない。林並木さんは明治三十九年（一九〇六年）八月二十四日案内者市作翁と二人で、槍ヶ岳から蒲田川源流右股を下つて蒲田温泉着（故小島鳥水氏に次いで第二降の記録）二十六日中尾の嶺師松葉七之助氏とともにアナゲノ谷から笠ヶ

岳に往復登山（二十七日は中尾峠・焼岳を経て上高地温泉に至り、二十八日大野川の岩魚釣師平田兼之助氏とともに岳川から前穂高（林氏は奥穂高最高峰一等三角標の下に達したと紀行に記している）に登頂し、略々往路の通り下山した。次の日梓川畔の岨道を下つて阿房峠に出たのであるが、この一連の山行は正しく日本登山史上に残る一先蹤行であつた。山岳一年三三所載「笠ヶ岳焼岳穂高岳紀行」並びに同会員の本年登山報参照。なお最後の穂高行に関しては、山崎安治氏の会報及び著書「穂高星夜」中の「穂高岳の早期登山者」を研究検討してみるのがよい。と角穂高の早期登山者の一人に林さんを数え得ることは喜ばしいが、今は悲しい。

林さんはまた、大正元年（一九一二年）八月末、富山から茂生・有峰を経て宿舎岩段に泊つたが、他の宿舎山口の主人辰次郎氏を案内として、二十九日薬師岳登山、真川畔の側師久太郎の小屋に泊、立山温泉に下つて、三十一日から別山・雄山・稜の当時の嶮を単独登山して九月一日戸崎寺に着いた。山岳七年三三所載「台湾登山報参照」。

また、山岳十一年三三所載「山岳」には、林さんが北米旅行の際タオ・湖の山の風光を終日みてからオウランドに出てそれからヨセミテに向かうという便りを寄せているが、それは恐らく山地観光といった類であつたろう。大正六年（一九一七年）の夏前のことであつた。それから翌大正七年六月十三日紐育日本倶楽部で故村幸男氏と合筆で日本の山の風物、信松と雷鳥に思いを走せた会員通信があるが（山岳十三年一号）いづれの時代でもハイマートを忘れ得ぬ岳人達の姿が偲ばれる。

本会創刊会員の林さん。その後の山歴は本会機関誌では殆ど発見できないが、現地会員の方からの報によると、林さんは壮年時代日本アルプスなどに随分まめに入られたようである。當時としてその山歴のヴォリュームは一流所に伍してはばからないものであつた。筆者が林さんに始めて、そしてたつた一度だけお会いしたのは、昭和三年（一九二八年）の夏、台湾中央山脈での山行コースと便宜を台北市在住の筆者に求めに來られた時であつた。今から三十年前のこと林さんは中老の齡にはいられたところだつたが、見るからに血色のいい温顔と柔軟な体軀を見せられて、やはり年を取らなかつたかと思ふ。同氏が遠慮され勝ちの所をおすめして能高越と蘇花道路・タロコ峽探勝を果していたのだ。ほんとうは新高山の予定だつたが、郡大審脱走事件のため入審許可が得られなかつた目的の変更であつた（山岳三十四年二二所載「台湾登山小史」二二九頁参照）。

それから二十年ばかりたつて、会報一四七号（昭和二十四年十月）には、林さんは会員通信として、去る十九年に京都から故郷の高知県佐川町に引き移られたこと、十六の時令兄に連れられて石鎚山に登つたのが始まりで、昭和十六年八月六十八才で第二回の槍ヶ穂高の縦走を果し、鳥水氏の逝去を始めて知つたことなどを書いていられた。

昭和二十八年（一九五三年）第八回団体登山が石鎚山で行われた少し前のころ、林和夫君、原全教君だつたかと思うが、林さんを御訪問申し上げたところ、世代は違ふが山男達との面談を非常に喜んだことがあられたというのを聞いた。今村幸男氏や、故吉沢庄作氏とともに林さんも本会の名譽会員に推薦したいという案が役員会に出て筆者も原則的に賛意を表したことがある。いづれも成立しなかつたことが、いづれも故人になつてしまつた今日、いかにも惜しまれてならない。

林さんと直接には一面識に過ぎなかつた筆者だつたが、地方に在られたがために、その山歴と後進への有形無形の指導致舞に終始つとめられた大先輩諸氏の実質が中央で取り上げられなかつたこと、ここよく考えなかつたはなるまい。林さんは金沢、京都、そして故郷の地においてそういう実質者であつた。そうした実質こそ広い基盤を標榜する本会の忘れてはならない淵源ではないだろうか。（一九五八・一一・二〇）

並木氏の追悼文

会報「二〇一号」の初校がでたところに名古屋在住の老嶋一郎氏（四二五二番）の追悼文が寄せられましたので本号に掲載できず、次号に掲載いたします。（編集部）

図書紹介

女性の山の本二つ

初恋の山

平凡社刊

川森左智子著

女性クライマーの一人川森左智子さん(日本山岳会会員)が、単身ヨーロッパの山を歩いた、これは「ヨーロッパの山一人歩き」といった紀行集。

出版記念会でも、これまでにあまり川森さんは書いてたり、写したりして発表されたものが、少なかつただけに、安易な文章と、カメラテクニクが、読者を驚かせたらしい。

その目的が山だか、お料理だから解らないが、とにかく日本の女性が、外地の山へ、良き山友達に招かれて、登られた一つの記録であるとともに、女性登山史にも特筆すべき歴史ともなった。川森さんの旅行に関する事務的な交渉や、岩登りへのためな努力などが、今度の山旅を、裏付けてくれたものであろう。ただ私達がつと知りたかつたことは、山小屋のお料理、女性の服装、女性の活躍状況、民俗研究等だった。

山恋

章文社刊
川崎隆章編

今までに発表された女性の紀行と随筆に加えて、登山の注意を

(村井米子氏) 装備について(今井喜美子氏) 服装について(坂倉登喜子氏)が、追加執筆した女性向の本、山と溪谷の編集長川崎隆章氏が、纏めて編集されたものが、これが編者も女性だったから、なお女性の味があつたかも知れなかつた。



通信

初秋の皇海山

小野尚俊

初秋の皇海山を訪ねてみた。九月十四日足尾から銀山平までバスに揺られ、それより庚申溪谷沿いの道を過つたのだが、道すがら未だ紅葉に早いとは言え、逢う者となし静けさが嬉しかつた。庚申山荘に着いたのが午後二時過ぎ、早速お山巡りに出かけたが湧き出した雲に視界はきかず、岩壁を彩るソリフネ草の紫の色が鮮かであつた。その夜の泊りは私一人、雨の音を聞きながら明日の好天を祈

つた。明けて十五日、垂れこめた雲も六時を過ぎてにわかにはれ出した。六時半、朝の光を浴びて出発、庚申山東面の急登を登つて笹原を分け山頂に立てば男体初め日光諸峯を眺越しに望見、ふり返れば春登つた架装丸山が雲をまつわりつけて厳しい姿を見せていた。行手には目指す皇海山が端正な姿を現わす。鋸連峯十一峯、亜高山帯の上下はなかなか変化に富み、ナナカマドの赤のつぶらな実生が印象的だった。駒掛、漢雲山、地蔵、薬師岳と岩峯から岩峯へ、瀧葉樹林から針葉樹林へつなぎとめて行く。白山はとりわけ眺望に恵まれ眼前の皇海山が悠容迫らぬ大らかさを見せていた。熊野、剣を越えて最高峯銀山に立つ。煙る沼田盆地を距て上越の山々が懐しく望まれた。いま通つて来た山々と半月山との間には悪地をもつて鳴る松木沢が足下より落ち込んでゐる。日光の山と言う山が積乱雲の下、ひしめき合つていた。目交の皇海山頂へは一条の伐開きが明らかにたづづいてゐる。急下降に続く長い登り。皇海山頂は米樹、樺に黒々と被られていた。深い静寂が漂つてゐる。ただそれだけの山なのだが、その秘かな静けさが私を山の霊気で包んでしまふ。正午過ぎ山頂を辞した。一旦、銀山に戻り、それより深い熊笹を分け境沢を下降して六林斑峠路に出た。途中清流があつて、倦くともならず苦勞させられた。魔道になつた峠路からは明るい峠の相越しに架装丸連山が仰がれた。つつじの紅葉、路傍を飾るアキノキリンソウに慰められながら山荘に戻

初秋の山

(九月十三日、登山道より(木山岳)北山、北嶺をへて黒岳に至る)

井手 真夫

うららかな秋の日ざしを浴びて谷川の音を聞きながら静かなる山道をひとり歩む。まだ紅葉には早く色づいてゐるのはわずかにつたの類となかなかの赤い実だけで、白樺の葉もまだところどころわずかに黄ばむばかり。人気がないこの道を、ついでにこないだも出たという熊を思ひながら角ごとに咳払いをするのは気安めだ。行手の空を区切つて高く、白く流がかる。その落口の樹間に見える深いコバルト色の空。ふり返れば深い針葉樹林の山々。滝を越えようと樹林帯を越えて、はい松と熊笹に蔽われた高原、ここではもうななかなかの葉も色づいて

やや白味がかったはい松の緑の中に燃えるように赤い。振り返る彼方にいつか開けた沼の平の高原には光を湛えた沼がひっそりと静まつて、それを守る白樺の木が一本、二本、三本。西の空には雲がわいて、やがて近づく嵐を思わせる。その下から大砲の音がとどろく。しかしいまここはななかなかの葉をゆるがすよ風の音と飛びまわるはえの音ばかり。やがて鳴きうさぎの声を聞く頃はもうななかなかもなくなつて、一面のはい松と高山植物地帯、がんこうらん、くるまめのみ、いおうめ、何よりもうななかなかの葉の燃えさる音が黄に赤に紅葉していまこの高い斜面は秋のまつさかりしやがて岩石と砂地が多くもうつつじの紅葉も枯れしおれてここは永山岳のいただきだ。白雲が去来しはじめて愛別岳の姿があらわれては消え、やがてくる冬を告げるように、吹く風が耳になりひびく。しずかに赤い斑紋を光らせてヒメヒロシチヨウが羽をひろけと飛んで行く。ああ、ここになお生があつたのだ。いや、若や枯れはてた草はもとより、石も岩も、生あるということができよう。幾万年の生をへて、幾万年の未来に生きるのだ。ああ、生あると見ゆるものこそ、つかのまの命。チヨウウよ、孤独なるチヨウウよ、お前の命をいとおしめ、やがて冬来りなんこの岩石の間に

東京支部便り

鳥海山報告

(懇親山行)

ゴトンゴトンとリズムカルな音に薄目を明けると、目に一つぱいに奇型な螺旋が飛びこみ、横たえて昨夜のこよなき寝床から這い上った。

もう羽黒号は、鶴岡も近く朝明けの出羽三山が、なだらかな山稜を見せ、刈り取られた稲束を、一本の丸太にしがつつかせて、乾燥させてあるのが、まるで簍を着た人間のような錯覚を起させる。

最上川を渡り、うる覚えの、奥の細道を頭の中で縫ぎ合せながら近づいて来る鳥海山に喜びと緊張が心の中をよぎる。その裾野の雄大さ、そして他に比較するものもないこの山は、高くもまた低くも随意に心の中で変えて想像することが出来る。いよいよ地方色豊かな吹浦へ降り、リーダーの指導によつて、荷物の調整が終るころにはもう皆百年の知己のような、親近感で結ばれてしまつてゐる。

ゴロゴロしたバス道を牛車に追われたり、白い頸を覗かせた大根島、赤い足の踊子のい並ぶような蕎麦島、小野曾部落では可愛い幼子が愛嬌よく私達を喜ばせてくれる。やがて駒ヶ丘も過ぎれば海岸線の起伏が実に素晴らしく、飛鳥、男鹿半島も見えて、広々とした海原、そして青い空は、その境は分らず庄内平野を覆ふ銀波が心はのぼのぼとさせて、休憩ごとに示される地図に現在地を心に印しながら、

安心感のある太平小屋が表われて来る。振り返れば観音森がニコライ堂の屋根を思わせ、蜿蜒と続く山稜の彼方に、吹浦、そして有耶無耶の関を経て象潟の町が光つて、来たるかなの感がひしひしとよせて来る。これより草紅葉の中にナナカマドの実が一総燃えて、池塘には、青い空、白い雲を浮べる河原宿へ、陽の傾きかけたのが総てを立体的に味わい深くしている。

おべべを汚して咲き残つてゐるチングルマ、鳥海アザミも刺を柔けて、竜胆がその青さを際立ててゐる。もう少し行ずめたらと心残りのまま御浜の小屋に着くと、鳥海湖と新山の岩肌が西陽に黒々と輝きながら待つてゐた。

そして信仰の山らしく、心地よい宿舎に疲れも拭かれ、美しい山のエキスのみを心に残して、朝明けを期待して表に出ると、雲が低く垂れこめていたのは意外であつた。でも晴れることを念じながらその名のような御田力原を過ぎ、千蛇谷の黒雪に喜ばされて、大物忌神社へ着いたときは雨が降り出し新山の針峰が、霧の間に見えかくれて伏した。やがて雨も本降りとなつて伏拝の分岐へ、点々と心字雪、そして鳥海湖、紅葉の眺めもよく晴天を思ひながらテント地によいような、石室の小屋に辿りつき、掛布団のような吹浦産の生揚げ、ホットジュースで、心身ともにぬくもり、全身濡れながらも心は晴々と油田のある湯ノ台鉱泉に出たら、今まで意識しなかつた恰好が気になりなにかおかしなやつて来た。そして待望の鉱泉で

心ゆくまでこの山の楽しかった数々を味わい、なにも勝る晩餐を楽しんだ。

雲の平

(角野仁子)

透明な光につつまれたお花畑の中、祖父沢源頭に私達のテントがあつた。

三度訪れた雲の平の晴れた空に薬師の全客がどつしりと大きい。霧の平、雨の平、そしてようやく晴れた雲の平に、相対した私の眼に涙がにじんだ。

久恋の雲の平から仰ぐ薬師の姿雪溪の下にひろがる高層湿原のお花畑、夢に見た雲の平の壮麗さに胸酔した幾日かは、あるときは湿原をさまよい、あるときは祖父岳に登り、或る時は岩魚のおどる沢を歩いた。雪溪のしづくをくみ、枯木を集めたあけくれの思い出は、

霧のときも、雨のときも、晴れたときも、みんな愉しい思い出だ。雪の平は私の第二のふるさと、そして心のふるさとでもある。北アルプスのホームグラウンドだ。やがて小屋が建ち、指導標が庭園のところどころに出来たとして、たとえテントが渾沢のように沢山張られても、自然の姿だけは変らないだろう。

静寂そのものの雪の平、雪鳥の遊ぶ雲の平、清純な湿原植物が地帯に影を写す雲の平、人影のない雲の平。

そんな姿があつたかと思うほどのそのころの思い出を。

そつと思ひ出すときが来るだろう。わたしが山にもう登れなくなつたときが来て、わたしの生活の中に、雲の平の姿は、いつまでも、いつまでも、消えることが、ないであろう。(坂倉登喜子)

御結婚お知らせ

戸野 昭氏(東京支部理事) 去る十月二十一日芝三井クラブに於て

挙式後十一月十二日三井鉱業株式会社、神岡事務所に転勤された。

雪深い神岡は北アルプスへは蒲田谷から、スキーは二階の窓からという、登山家には大変恵まれた場所、併し寒さも当分の間は、高熱のため感じないことだろうとは東京支部のさえずりである。

鳴原啓佑氏(東京支部理事) 十一月二十二日大隈会館において藤居洋子嬢(会員番号四七五二)と近藤等早大山岳部長夫妻の媒酌により挙式されました。新郎は人も知る早大山岳部女子監督をされた人であり、新婦は新郎の監督の下に女子部員として山行をとまとしており、まさに「山に咲くロマンの花」であります。御両人は二十二日挙式後すぐ新婚旅行に出かけ二十九日早朝無事帰京されました。なお新居は文京区丸山町四〇光陽建設アパート二〇二号室です。(S・O)

会務報告

〇十月一日 会員懇談会
▽本部理事会報告(野田) 鳥海山(支部山行)報告(中島)

▽チヨゴリザ報告(藤平)

〇十月十五日 理事会
▽一月スキー講習会計画(安彦)

〇十一月五日 会員懇談会
▽総会報告 会長日高信六郎決定

▽八ヶ峰スキー講習会決定
▽冬山の装備について(大塚博美)

▽富士山講習会について(星野)

〇十一月十九日 理事会
▽富士山講習会講師派遣の件
▽戸野理事神岡へ転勤理事補充の件 会報編集の件(坂倉)

東京支部(集会お知らせ)

一月七日(第一水)懇談会
一月二十一日(第三水)役員会

一月二十二日(第四木)婦人部
〇第一水曜日は会員懇談会を毎月催しておりますから、新会員の皆様は是非御出席下さい。会への希望や山行計画などを持ちよつて会員の懇親を計りたいと思ひます。通知がなくてもお集り下さい。

スキー講習会(東京支部)
期日 昭和三十四年一月一日

場所 八ヶ峰(定員三十五名)
会費 三、四〇〇円(バス往復、宿泊金)

申込 十二月二十五日迄
係 係

準備会 昭和三十四年一月八日
(木) 於ルーム 六時

係 野田三郎、安彦三郎
(準備会には必ず出席のこと)

会務報告

臨時会員総会議事録

▽日時 昭和三十三年十月二十五日午後二時より

▽場所 日本体育協会 会議室

去る九月十九日、急逝された別宮会長の冥福を祈り黙禱を捧げた後折井理事の司会で、記録係として野田、宇田川両君を指名。臨時総会の議長を定款第二十九条により万場一致にて松方三郎氏を推し議事に入る。本日の出席者四十一名、委任状五名(内二名意見添付)電話の委任二名、欠席に依る委任出席の取扱は一四二一名、合計一四六九名。

議長、別宮会長死去に伴い会長の欠員を補充する必要ありやと云うことが本日の議題であるが如何。

折井、会長を補充の必要を認めるまでに至った役員総会の経過説明を求む。

折井(議長指名に依り説明)会長の任期は昭和三十五年三月までであり、後の一年半を副会長が会長代理ということでは種々不便な点が多いし、また海外的にもよくない。先般、日本体育協会の理事者にも意見を聞いたがこの際臨時会員総会を開催しても、後任会長を選任すべきだと言うのが役員全部の一致した意見であった。

るか如何。

折井、役員総会としては、現在副会長の一人であり、会長代理をしておられる日高信六郎氏を推薦したい。

満場一致で日高信六郎氏を新会長に推す(任期昭和三十三年三月までとする)

議長より右事項の正式決定宣言あり。

議長、日高氏が会長に就任されることにより副会長名欠員となる必要があるかどうか。

折井、会長が決定したから議長に新会長がなるのではないか。

日高、まだ臨時総会が継続しているものであるから議長を別に変える必要はないと思う。

折井、定款第二十九条は通常総会ならば会長が議長を勤めると言うことであるが、今は臨時総会であるから会員の互選で決めた議長で支障ない。

藤木、新会長の施政方針を御聞かせ願いたい。

日高、只今、私が新会長に推されたわけであるが山岳会全体の伝統を守り、日本の山岳界全体の役に立つ様、広く大きな包容力のある日本山岳会にしたい。出来るだけ多くの会員の意見を聞き、役員の援助によつてその責務を遂行したい。

議長、副会長補充如何の議題を進める。

山下、役員会においてはこの問題を討議したことがあるか、またあればその意見を聞きたい。

折井、副会長が名と言ふことは現在の本会の仕事から考えると

人手不足と言う感がある。しかも後一年半の間空席では困ることが多い。役員会の大多数の希望としては、具体的に申上げるならば現在評議員の三田氏が適任であり、副会長は理事の中から選ぶことになつてゐるから、理事になつて頂いてその上で副会長になつて頂いたらということである。役員の中でも一、二の意見としては、臨時会員総会で副会長まで決定する必要はない。四月の通常会員総会までに冷却期間を置いてよく考えた上で決定したらよいというものもあつた。

折井、別宮会長の喪中でもあるから、会長補充選任に便乗して今副会長の補充を決定するよりは暫く冷却期間を置いて考えを練り、次の通常総会で決定すべきである。

議長、意見を述べ合うのは必要であるが、これは意見が二つになつてゐるからといつて投票で決めるのではなく、全会一致の意見としたい。

折井、副会長は名でも常務理事が数名もいることであるし、これが会長、副会長を補佐すればよい。われわれのときには私一人位でも立派に会務を処理した。現在ルームの来室者署名簿を見てもよく来ているのは松田理事位のものだ。

太田、折井氏は副会長の補充は冷却期間を置いて考えを練ると言われたがその意味は何か。

折井、人選についてであつて、副会長式名と言ふのに反対してゐるのではない。

南の山靴とスキー用品

登山とスキー行に一番主要な役を持つ山靴とスキー靴はミナミ独得の技術最高の材料で作つたものをお奨めします。

テント
スキーと山の服装
キスリング
サブザツク

各種取揃

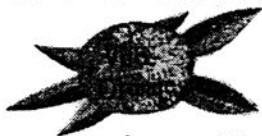


スポーツ用品

ミ ナ ミ

神田小川町中央角 TEL (29) 1359

T. S. FLAVOUR



楽しい登山に スポーツにノグフト一杯美味しいジュース
本品は水にもけやすく簡単に使用です。
一箱600円(税別)に入っています。

土 谷 商 事

東京都杉並区大宮前6ノ340

登山用具の専門店

好日山荘

中央区銀座南二ノ五
TEL 京橋(56) 3600



年次晩餐会

昭和三十三年度年次晩餐会は十二月十二日午後六時半から新丸ビル地下ホールスターで開かれた。近藤名誉会員をはじめ九十名をこえる出席者があり、ヒマルチュリ登山隊員も全員出席、浜野理事より紹介あり、また帰国した金坂、石坂両隊員の挨拶、およびスライド映写があり九時散会。

別宮前会長追悼会

去る九月逝去された別宮前会長追悼をかね、木暮、小島、高頭元会長、ならびに前北田九州支部長を追悼する会は十二月五日午後六時半から麻布国際文化会館で開催、別宮梅子、同貞雄（別宮前会長末亡人、御長男）高頭芳夫、竜夫（高頭氏のお孫さん）北田岳郎（北田氏御長男）柳下照子（別宮氏前秘書）の各氏が出席され盛会であった。別宮氏の国体の映画、新旧役員会での録音テープ、その他沼井、岩永、冠、横氏などから追悼談があつた。

ヒマルチュリ先遣隊 々員帰国

ヒマルチュリ先遣隊金坂一郎、石坂昭二郎両隊員は十二月五日午前九時横浜着のサンゴラ号で帰国した。

小集会

一八八回小集会 十一月十九日午後六時半から体協会議室で杉本良一、辰沼広吉両氏による「高山病と凍傷、凍死」の話があつた。
一八九回小集会 十二月八日午後六時半から体協会議室において「装備に関するシンポジウム」を行った。南極観測隊 鳥居鉄也氏、チヨゴリザ 加藤泰安氏、ヒマルチュリ 初見一雄氏。

編集後記 二〇一号は会報編集

者の山崎氏から支部の編集である坂倉、小倉の二名にまかされて、いろいろと苦労してみましたが不勉強者の悲しさ、編集のエキスパートのようにはいかず、おしかりの多いこととは思いますがおゆるし下さい。なお会報の総目次は編集者の不明から次号になりました。ことを重ねておわびいたします。（坂倉、小倉）

昭和三十三年十二月廿五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六

発行所 法人 日本山岳会

編集者 山崎 安治

頒価二十円 電話 神田(区)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式会社 技報堂

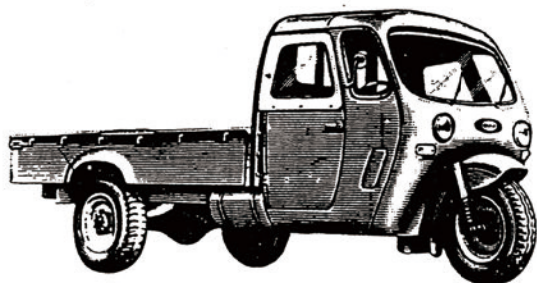


NYLON TENT

SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

ゆったりした3人掛の運転席



乗用車と間違わないで下さい。3輪車でこんなにゆったりしているのです。しかも軽い丸ハンドルですから、長距離輸送でも疲れません。

- ・アンダーフロアエンジン
- ・オーバーヘッドバルブ
- ・AB型2 吨積

他に1 吨車の決定版とご好評を頂いておりますTR型がございます。

山なら絶対!!

オリエント

Hino 日野ディーゼル

も寄りの地区販売会社でご用命をお待ちしております